戦時中の私と家族について

岡本浩人（当時、加東郡社町在住　10 歳頃の話）

昭和十六（一九四一）年、父が召集令状で二度目の出征となった時、近所の写真屋さんで家族で写真を撮影した。私は昭和八年四月二十二日の生まれなので、当時八、九歳。弟は二歳年下、妹は母の腕の中。私は学生服に着替えて、母は着物も着替えたのか、二枚撮影している。

父は満州・牡丹江省（現・黒竜江省）へ出征。川を挟んで、向こう側にはソ連兵がいる。夜中、零下四十度か三十度の中、歩哨に立っていて、小用をたすとつららになるというようなことが手紙に書いてあった記憶がある。父がそのようなところで頑張っていたため、私も「負けてたまるか」というような十歳だった。過労で寝込んでいた母も、国の指導にそって「家庭内の鉄製品はお父さんの鉄砲の弾になるからすべて出すように」と強調した。火鉢の中に置く三徳から、鉄火箸、自転車に至るまで、全て出した。鉄の鍋でも釜でも、茶釜みたいなものまで「すっからかん」になるまで出して当たり前の時代だった。戦争に負けるというようなことを思ったこともなかったし、長男だったが、自分も戦争に行くと決めていた。今にして思えば、国が教育方針を誤ると子供に与える影響は大きく、怖いと思う。

母は手編みが上手で速いということが評判で、加東郡の各方面から編み物の依頼があった。当時は新品の毛糸を持ってくるような人はなく、おじいさんの毛糸の股引を持ってくるような形で、母は夜中にそれをほどいてほぐし、綛（かせ）にして、ゆのしをし、玉に巻き、木綿糸と縒り合わせるという作業をしていた。私もそのお手伝いをしていた。その糸を、母は昼間に編んでいた。父の出征中にも生活が成り立っていたのは、母が編み物のお礼としてカボチャやジャガイモなどの野菜を受け取っていた、というのが正しいように思われる。米などは手に入らず、麦もようやくのことで手に入れるという時代に、母が寝込んでしまった後、母と弟や妹の四人分の調理を私が担当していたが、どうやって食料を手に入れることができていたのか、今でも不思議である。大変だとわかっているので、農家の人が野菜ができたからといって、運んでくれたりした。母は字も大変上手であった。指先が器用だったようで、回復して元気になってからは、編み物を教えてほしいと、よく若い女性から頼まれて教えていた。母は七十七歳まで存命であった。

千鳥川から洗濯のために引き込んで作られた「洗濯川」があった。切り込んだ石で整備した洗い場で

洗濯物を叩けるような状態になっていた。時には母の腰巻も洗わなければならなかったため、まだ暗いうちに「洗濯川」へ行って、洗濯をしていた。帰りは自宅へ向けて上り坂となるため、濡れて重くなった大きな洗濯物を抱えて上るのがつらく、自転車が欲しいなと思っていた。その自転車は供出で出してしまっていた、そんな時代だった。

自宅の前にはお寺があって、お寺の土手に防空壕があった。防空壕は、お寺の土手に二本あり、奥で連結してU字型になっていた。空襲警報が鳴ると、そこへ入るように町の人が呼びにきたが、母が寝込んでいたので、「うるさい、病気の母を放って、置いていけるか、私のところは絶対に行かない」と、おじさん連中と渡り合った。私は、家庭のことも全て自分でしなければならないという思いがあり、気が立っていた。学校に行って勉強もしなければならなかった。母は、学校を休んではいけないといって、一日も学校を休ませてはくれなかった。防空壕の上は畑になっていたが、何年か前に陥没してしまった。

防空壕には二回ほど入らされたことがあるが、じめじめしていた。素掘りのような防空壕で、二本並びの壕で奥で連結するかなり大きな防空壕だった。空襲警報が発令された時には町民全員がそこへ行くことになっていた。

観音寺さんは私たちの遊び場だった。鬼ごっこをしたり、大石良雄の碑の後ろに隠れたりしていた。入ったところに大きなクスノキがあって、そこでかくれんぼの鬼が目隠ししていたと思うけれど、雷がバリバリといったかと思ったら、その木にガーンと落ちて、鬼をしていた子も私たちもボーンと飛ばされた。それをあまりにもリアルに認識したため、小学校の綴方の時間に「雷」という題で作文を書いた。先生に「浩人ちゃん、これは学校で書いたの」と尋ねられたので、「はい」と答えた。先生は「じゃあこれ、いただくね」と、職員会で作文をどこかへ出すという話があったと言っていた。九月の二学期が始まった時だったか、朝礼で全生徒が中庭に集合した時に、校長先生が「岡本ヒロンド」というので、自分ではない、だれかそういう人がいるのかと思っていたところ、担任に「返事しなさい」と怒られたため、「はい」と返事をした。大きな賞状をもらい、大層ほめてもらって、作文というのは楽しいなと思うようになった。

母は神崎郡の寺前町、父は市川町の出身。駅からだいぶ離れたところなので、そう簡単になにか送ってくれたり、もらいに行ったりすることができない。福崎町の方に父の姉がいて、正月に餅をもらい

に行った。社から加西を抜けて行ったが、今のいこいの村の池のところを自転車で通る時に、吹雪で弟が泣いてしまった。相当くたびれているように見えたのか、池を越えた下の家のおばあさんが、「あんたらちょっと寄んなさい」と言って、縁のようなところに座らせてもらって、熱いお茶をもらったことが忘れられない。自転車にいっぱい餅を積んで帰ろうと思っていたら、私の自転車に少し積んでもらっただけで、弟の自転車は空のままだった。ここまで来てこれだけの収穫かよと少々不満だった。